埼玉県東南部方言の特徴と本書の概要

本研究は、埼玉県東南部の大宮台地安行支台と東側中川低地地域(川口市東部、草加市、八潮市辺り)に行われていた伝統的方言、とりわけ北足立郡「旧安行村」とその周辺の方言の言語体系を記述対象としている。この地域で行われる言語は大づかみに言えば、戦前(1945 年以前)に言語形成期を終えた世代、高度経済成長期以前(1970 年頃以前)に言語形成期を終えた世代、高度成長期以後の世代で、体系が大きく変容しているが、戦前期と高度成長期以前の世代の言語を記述対象としている。

本書は、1972 年の修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』を原本として、その後の調査と研究をふまえた 1996 年の補注版(私家版)の『埼玉県東南部方言の記述的研究』の新たな改訂版であるため、戦前世代を「高年層」、高度成長期以前の世代を「成年層」と指称している。内容に関して、音韻篇は 1970 年から 1972 年に集中的に調査したものを基にして記述されている。文法篇はその後の 2000 年頃までの調査・研究をふまえて加筆補足されている。

埼玉県東部地域は、「埼玉特殊アクセント」(cf. 金田一春彦『埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察』(1948 謄写印刷))の地域として方言学の分野では知られる地域であるが、体系的で内在的な調査と研究が十分なされているとは言えないように思う。例えば、埼玉県方言では一般に非語頭のガ行鼻音(鼻濁音)が行われないとされているが、東南部地域には広く行われていることが象徴的で、音韻(発音とアクセント)や構文的機能を担う格助詞の実態などは殆ど知られていない。筆者(1947 年埼玉県旧安行村[現草加市]生)は、ことばが同じと感じられている周辺地域も視野に入れて地域言語のその言語としての体系を音韻・文法・語彙にわたって言語学的に明らかにしようと試みた。その一応の報告が本書である。

音韻に関して

音声学的分析は服部四郎『音聲學』(1951 岩波書店)に拠り、国際音声学協会の音声記号に基づいて記述している。埼玉地域の言語音の精密な音声学的分析と記述は本書の大きな特長と言えると思う。例えば、タ行・ダ行・ナ行の頭子音は同器官的と一般に信じられているが、当方言において前二者は歯裏歯茎音

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

まえがき

本書は、1972 年(昭和 47 年)の修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』を原本とし、その補訂版である 1996 年(平成 8 年)の私家版『埼玉県東南部方言の記述的研究　付．埼玉県東南部方言語彙集』を改訂したものである。基本的に 1972 年の原本の枠組みと内容・形式を維持している。しかし、その後の 40 年余の調査・研究で判明したことや言語事象に対する把え方・考え方の進展によって、変更・補訂の必要が生じた箇所については、「訂正」「補説」などとして必要な変更・補訂を加えた。文意明確化のために加えた加筆・修正等については特に断らない。

「1. 音韻(分節音素)」と「2. アクセント(かぶせ音素)」からなる音韻篇は、調査内容の性格上 1972 年当時のままとした。従って、その後の変容(共通語化)は追っていない。「3.　文法」の文法篇については、構文法や格助詞に関する調査と研究の深化に伴い、記述の形式と内容を改める必要を感じているが、書き改める場合の全体の構想と体系が十分にできていないため、関連箇所での注記(注記は内容上重複することがある)と、その後に書き継いだ論文二編を便宜的に「4. 構文法」として別立てして載せることにとどめた。

また続編の「語彙集」は、殆ど死語の俚言や民俗語彙だけでなく、基礎語彙や機能語もその音韻的特徴や文法的機能など目立つものについて気づいたものを記録し記述するように心がけた。

著者は、本書で「方言」を「言語」として記述している。基本的には、言語を構造・体系をなすものとして記述しようとしている。いわゆる国語学・方言学の伝統とは自由な立場から、構造言語学的に、言語としての方言の言語事象を明らかにしようとした。基本的に構造言語学の理論と方法論に基づいているが、文法の記述においては、構造言語学以後の、格文法・結合価理論・生成文法・言語類型論等の諸知見も参考にし、記述に有用な概念や術語は、必要に応じて用いている。なお、修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』は、1970 年(昭和 45 年)の学士論文『埼玉県草加市小山町方言の記述的研究』を受けて、研究範囲と内容を拡大したものであることも言い添えておきたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

埼玉県東南部方言の特徴と本書の概要　iii
音韻に関して　iii
文法に関して　v
本書「語彙篇」としての CD-ROM 版「埼玉県東南部方言語彙集」について　viii
まえがき　ix
調査地域　x
調査方法およびインフォーマント　x
調査の結果と記述の態度（1972 年のまま載せる）　xii
方言の境界　xiii
「2014 年現在の方言の現状と本書との関係」　xiv

1.　音韻.....1
1.1　音素の数とその種類　3
1.2　音素体系　3
1.3　シラベーム syllabeme の構造　4
1.3.1　シラベームの種類　4
1.3.2　音素の分布の制限　5
1.4　モーラ mora　5
1.5　モーラ表　6
1.6　音素とその異音　7
1.6.1　母音音素 /V_1/　7
1.6.2　母音音素 /V_2/ ＝ /R/　〈「引き音（引音）」〉　17
1.6.3　呼気段落末尾の /V/ および /VR/ について　17
1.6.4　半母音音素 /S/　18
1.6.5　子音音素 /C_1/　20
1.6.6　子音音素 /C_2/　30
1.7　母音の無声化について　36
1.8　鼻的破裂音 faucal plosive について　39

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

1.9　強調的な子音の gemination（音重複）について　39
1.10　音韻変化　40
1.10.1　完成的音韻変化　42
1.10.2　不完成的音韻変化　45
1.10.3　語彙的な変化　54

2.　アクセント 59
2.1　アクセント体系　63
2.1.1　アクセントの相　63
2.1.2　アクセントの型　64
2.1.3　アクセント体系のまとめ　67
2.2　アクセント型とその所属語彙　70
2.2.1　体言類　71
2.2.1.1　準 2 モーラ語のアクセント　71
2.2.1.2　2 モーラ語のアクセント　72
2.2.1.3　3 モーラ語のアクセント　77
2.2.1.4　4 モーラ語のアクセント　83
2.2.1.5　5 モーラ語のアクセント　85
2.2.1.6　6 モーラ語のアクセント　87
2.3　アクセント各説　88
2.3.1　動詞のアクセント　88
2.3.1.1　活用形のアクセント　89
2.3.1.2　動詞のアクセント型と所属語彙　94
2.3.2　形容詞のアクセント　98
2.3.2.1　形容詞のアクセント型と所属語彙　100
2.3.3　用言の類別語彙とその対応　103
2.3.4　付属語のアクセント　104
2.3.4.1　助詞のアクセント　104
2.3.4.2　助動詞のアクセント　110
2.3.4.3　連結に伴うアクセント変異　111

3. 文法 113
3.1　品詞分類　117
3.2　動詞　119

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3.2.1　動詞の形態(論)的特徴による種類分け　125
3.2.2　活用形概説　143
3.2.3　能動詞・所動詞 / 生物類名詞・無生物類名詞について　197
3.3　形容詞　204
3.3.1　形容詞活用形概説　211
3.3.2　情意形容詞・感覚形容詞・性状形容詞　219
3.4　状態詞　223
3.5　名詞　227
3.5.1　狭義の「名詞」　230
3.5.2　位置詞　232
3.5.3　時数詞　233
3.5.4　代名詞　233
3.6　副詞・連体詞・接続詞・感動詞　239
3.7　助動詞　242
3.8　準体助詞　253
3.8.1　名詞的準体助詞　253
3.8.2　状態詞的準体助詞　257
3.9　助詞　259
3.9.1　格助詞　259
3.9.2　副助詞　292
3.9.3　接続助詞　296
3.9.4　並立助詞　298
3.9.5　終助詞　298
3.10　間投助詞　301

4. 構文法..... 303
4.1　埼玉県東南部の方言(旧北足立郡安行村方言)の「統語的格助詞」の配置　305
4.1.1　「基本構文」における統語的格助詞の配置　305
4.1.1.1　一項述語文における統語的格助詞の配置　305
4.1.1.2　二項述語文における統語的格助詞の配置　305
4.1.1.3　三項述語文における統語的格助詞の配置　309
4.1.2　「関連派生構文」における統語的格助詞の配置　309

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4.1.2.1　「使役文」における統語的格助詞の配置　310
4.1.2.2　「間接受動文」における統語的格助詞の配置　311
4.1.2.3　「直接受動文」における統語的格助詞の配置　311
4.1.2.4　「可能文」における統語的格助詞の配置　312
4.2　方言の基本的文型と格助詞　313
4.2.1　二項述語文　313
4.2.1.1　動作主主語をとる典型的な他動詞構文　313
4.2.1.2　特異な「二重化された目的語」をとる他動詞構文　315
4.2.1.3　動作主主語をとり、目的語に対格以外の格をとる他動詞構文　316
4.2.1.4　経験者主語をとる他動詞構文　318
4.2.1.5　経験者主語をとり、目的語に対格以外の格をとる他動詞構文　318
4.2.1.6　経験者主語をとる所動詞（非対格動詞）構文　319
4.2.1.7　経験者主語をとる情意形容詞構文　321
4.2.2　三項述語文　323

あとがき　328

原田伊佐男氏の学問（久島　茂）　330

索　引　332

付録 CD-ROM［PDF ファイルにて収録］
・埼玉県東南部方言語彙集
・［付録］「琉球語の活用の成立に関する考察
――「居り」・「有り」の「終止形」をどうみるか――」

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

主な【補足・補説】項目等：

p. 142　「基本語幹」と「実現語幹」(いわゆる「音便語幹」)について
p. 168　「アスペクト」について—「終結形 /-cja'-u/」と「継続形 /-te-ru/」—
p. 169　「E-1 終結形 /-cja'-u/」の終結相について
p. 170　「E-3 継続形 /-te-ru/」の「継続相」について
p. 183　他動詞派生接尾辞「- カス /-kas-u/」について
p. 187　「二重使役の 2 タイプとその受動形」について
p. 192　特異な「二重化された目的語」をとる他動詞の受身表現
p. 198　「他動詞」と「二項所動詞」について
p. 209　終止 = 連体形の末尾音 /V²ʀ/ の /V²/ を語幹とする形容詞活用について
p. 226　体言の「状態詞」と用言の「形容詞」について
p. 228　「補語」について
p. 231　居住地名・組織名の「集合名詞」的用法について
p. 233　「人称代名詞」の「定称」の階層性と二重の二項対立について
p. 254　名詞節を作る 2 つの /no/(「名詞化助詞 no¹」と「代名助詞 no²」)について
p. 261　「が」格で表示される共通語のいわゆる「対象語」に対応する表現について
p. 265　対格コトの必要性について
p. 269　格助詞「コト・ゲ・ニ」と複合動詞「+つく」と単純動詞について
p. 271　能格ガニの必要性について
p. 271　格助詞 /ŋa˥ni/ についての訂正と補足
p. 277　「感覚形容詞文と性状形容詞文の特異なガニ」について
p. 278　「ガニ名詞句」が主語であることについて
p. 288　格助詞 /ŋa˥ni/ と /ŋe/ および準体助詞 /ŋa˥no/ の語源について
p. 288　格助詞 /ko˥to/ の語源について
p. 290　埼玉東南部方言における対格 /ko˥to/ と能格 /ŋa˥ni/ の併存問題について

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

1.1　音素の数とその種類

音素には次のものが認められる。

子音音素

C_1：シラベーム syllabeme の Atama に立つもの

/p, b ; t, d ; k, g ; h, ’ ; c, z, s ; r ; m, n, ŋ/　(15)

C_2：シラベーム syllabeme の Siri に立つもの

/Q , N/　(2)

半母音音素

S：シラベーム syllabeme の Kubi に立つもの

/j , w/　(2)

母音音素

V_1：シラベーム syllabeme の Mune に立つもの

/i, e, a, o, u/　(5)

V_2：シラベーム syllabeme の Hara に立つもの

/R/　(1)

合計 25 の音素が認められる。

1.2　音素体系

音素はその弁別的特徴 distinctive feature（および関与的特徴 relevant feature）の点で、次のような体系を成している。

子音 / 母音	漸強音 / 漸弱音	調音点	口音 / 鼻音	調音法	有声 / 無声	音　素
子　音	漸強音	両　　唇	口　音	破　裂	無声	/p/
子　音	漸強音	両　　唇	口　音	破　裂	有声	/b/
子　音	漸強音	両　　唇	鼻　音			/m/
子　音	漸強音	歯＝歯茎	口　音	破　裂	無声	/t/
子　音	漸強音	歯＝歯茎	口　音	破　裂	有声	/d/
子　音	漸強音	歯＝歯茎	口　音	破　擦	無声	/c/
子　音	漸強音	歯＝歯茎	口　音	破　擦	有声	/z/
子　音	漸強音	歯＝歯茎	口　音	摩　擦	無声	/s/
子　音	漸強音	歯　　茎	口　音	弾　き		/r/
子　音	漸強音	歯　　茎	鼻　音			/n/
子　音	漸強音	軟口蓋	口　音	破　裂	無声	/k/
子　音	漸強音	軟口蓋	口　音	破　裂	有声	/g/
子　音	漸強音	軟口蓋	鼻　音			/ŋ/

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

埼玉県東南部地域の方言のアクセントは、(揺れがないわけではないが、)自然の談話では比較的に一定して安定的であると認められる。しかし、ある種の特殊な場面では、日常の会話に現れるものとは異なった特異なアクセントや揺れが顕著に表れる。このことは、筆者自身の発話の反省においても、またアクセント調査(口頭の質問、絵を見せて答えさせる方法、語句・文を読ませるナドの調査)の体験を通しても明らかである。この現象は高年層・成年層を問わない。ある種の特殊の場面とは、共通語的な場面でのよその人との対話や、人前で本を読むなどの緊張を伴う場面であり、その極端な場合がいわゆるアクセント調査や方言調査などの場面である。高年層の揺れはその間に一貫性を見いだしにくい(一貫性がないわけではない)けれども、成年層以下だと、(方言調査などの場合を除き)揺れの間にある種の規則性を見いだしうる。その揺れを、方言アクセントと読書音アクセントという形でひとまず把えうるのではないかと思っている。(もちろん、個人差もあって、単純にこう言い切ることには大いに問題があることを理解している。)

読書音アクセントとは、基層としての方言アクセントの上に覆いかぶさっているもので、その音相は、共通語(東京方言)的アクセントに類似しており、本を読むとき(内言のときも外言のときに同様)や、人前で物を言うときに現れる傾向がある。しかし、これは単純に共通語アクセントが借用されていると考えるべきではないと思う。筆者の内省を述べれば、自身の有する方言アクセントが、その体系と各型の所属語彙において、共通語のそれとの間にかなりの程度に著しいパラレリズムがあるために、方言アクセントを土台として、共通語のアクセントとの接触を通して、それに類推して現れたと考えることの方により多くの妥当性を感じている。

例えば、「露」(「桶」も同類)は(筆者の)読書音アクセントは、(共通語が「頭高型」であるのと違って)「尾高型」で [ˊtsu⌈ju, ˊtsu⌈ju ⌊aru, ˊtsu⌈ju ⌊ŋa aru](簡略表記。以下同様)となるが、これは方言アクセントが、[ˊtsu⌈ju, ˊtsu⌈ju ⌊aru, ˊtsu⌈ju ŋa ⌊aru]で「腕」類と同型になっていることから初めて説明されうる。アクセント核のあるアクセントには次の2類型があり、その分布において「露」は「腕」と同じだからである。

例：「雨」読書音アクセント [⌈a⌊me,⌈a⌊me huru,⌈a⌊me ŋa huru,⌈a⌊me no naka]
　　方言アクセント　[ˊa⌈me, ˊa⌈me ⌊huru, ˊa⌈me⌊ŋa huru, ˊa⌈me ⌊no naka]
「腕」読書音アクセント [ˊu⌈de, ˊu⌈de ⌊itai, ˊu⌈de⌊ŋa itai, ˊu⌈de no na⌊ka]
　　方言アクセント　[ˊu⌈de, ˊu⌈de ⌊ite(:), ˊu⌈de ŋa ⌊ite(:), ˊu⌈de no naka]

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers